# 中部

5. 淀川（わんど）

中部は淀川と大和川にはさまれた地域で、一番西の最も低いところが大阪平野、大阪城のある小高い上町台地の東側が河内平野、それから東に枚方丘陵、金剛生駒山系の飯盛山、生駒山、高安山へとつながっています。最も都市化が進んだ地域ですが、淀川や山地には特有の自然が残されています。

淀川の河口域で、海水と淡水が混じりあう汽水域には、潮の満ちひきで干潟ができたり、ヨシ原が広がっています。干潟には、クロベンケイガニやアシハラガニ、ヤマトオサガニなどが多く、コチドリやキアシシギなどのシギ・チドリ類の鳥もよくやってきます。ヨシ原にはシオクグやウラギクなど、海岸特有の塩生植物（海岸など塩分の多い場所に生える植物）が生えていて、瀬戸内海沿岸では唯一のヒヌマイトトンボの生息地があります。



5. 北山 昭　6. 森 正人

城北、八雲や楠葉の「わんど」（P.24参照）には、多くの魚類やエビ類、貝類、水生昆虫、水草などが生息・生育していています。また、本流にすむ魚などの逃げ込み場や繁殖場所としても重要です。「わんど」は、以前は500個もあったそうですが、河川の整備が進み、今では50個に減ってしまいました。天然記念物のイタセンパラやアユモドキなどの魚類、エサキアメンボやオオサカサナエ、アオヤンマなどのトンボ類、マツカサガイやイボカワニナ類などの淡水産の貝類など、「わんど」特有の生きものが観察できますが、最近はとても少なくなっています。冬には北方からマガモやヒドリガモなどのカモ類が渡ってきて、大小のにぎやかな集団ができる場所でもあります。

ヨシ原や河川敷には、大阪では珍しく湿地性や草原性の昆虫（トノサマバッタやクルマバッタモドキなどのバッタ類、オオサカヒラタシデムシ、ジュウクホシテントウなど）やほ乳類・鳥類（カヤネズミ、ジネズミ、オオヨシキリ、オオジュリンなど）が多くすんでいます。また、ノウルシやハナウド、タコノアシ、オオマルバノホロシ、ミコシガヤなど、日本古来の植物が多く残っていますが、セイタカアワダチソウやセイヨウカラシナなどの外国から入ってきた帰化植物におされ、生育場所をせばめられています。

山地には、比較的雑木林がよく残っていて、北摂山系に多いウラジロミドリシジミやオオムラサキなど、里山の生きものも生息しています。枚方丘陵の尊延寺付近には、湿地性や草原性の植物や昆虫たちが、穂谷付近にはゲンジボタルをはじめとする水生昆虫や、カスミサンショウウオなど湿地性の生きものが生き続けています。四條畷市の室池には広い湿地があって、今では珍しい種類となったハッチョウトンボやネクイハムシ類、オオコオイムシなどがみられるかもしれません。

6. ヒヌマイトトンボ